

法徳寺だより

第105号 発行
浄土真宗本願寺派
法徳寺
厚木市岡田5-4-12
TEL 046-228-3962
FAX 046-229-6962
住職 伊東英幸

10月9日(火)
10月10日(水)

報恩講のご案内

報恩講のお願い

ご参拝頂ける方は、事前に申し込みをお願い致します。同封のハガキに記入して、郵送して下さい。参加者一人3000円程度ご協力お願い致します。

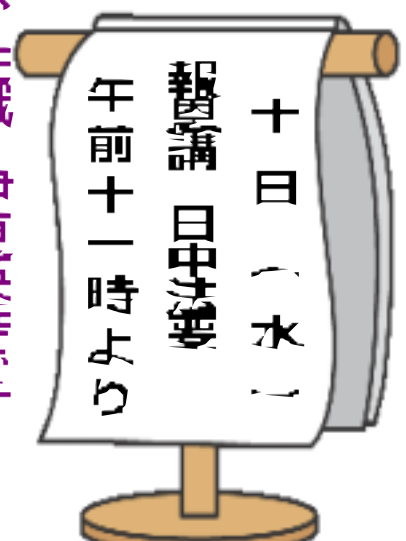
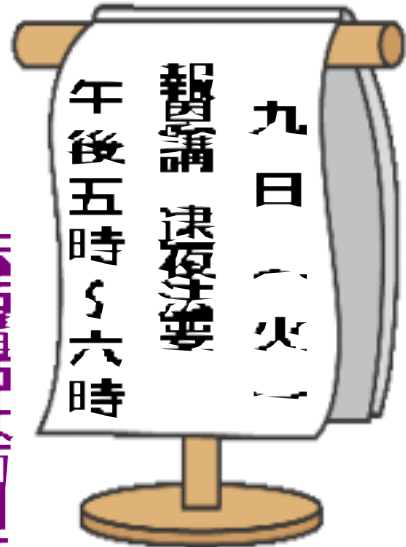
服装は平服で構いません。

ご欠席の場合、一戸3000円をご協力頂ければ幸いです。お布施は、阿弥陀様にお供えし、報恩感謝の読経をさせて頂きます。郵送にてお願い出来ればと、思います。どうぞ宜しくお願い致します。
住職

報恩講は、私達の浄土真宗をお開きになった、親鸞聖人のご命日(旧暦11月28日)を縁とした、浄土真宗最大の行事で、二日間行われます。「速夜(たいや)法要」は、お通夜にあたるものです。法要後、お弁当・お酒をご用意しています。

「日中(にちゅう)法要」は、いつもと違い、華やかな飾りつけの本堂で、多数の僧侶の読経により行われます。読経、法話の法要後、おとき(精進料理)を召し上がります。お酒の用意もありますので、飲まれる方は、お車はご遠慮ください。

法要師は四日共、住職 伊東英幸です



築地本願寺団体参拝

今年も、築地本願寺の報恩講へ、大型貸切バスで団体参拝致します。



日時 11月13日(火) 朝7時30分 法徳寺出発

東名の混雑が予想されるため、朝は駅には寄りません。早めの集合をお願いします。

費用 5500円(当日、ご持参ください)

寺に車を置かれても結構ですが、酒の用意があります。飲まれる方は、車は禁止です。飲酒運転厳重ご法度です。

当日の予定

築地本願寺の報恩講参拝・おとき(昼食)
築地場外市場にて買い物・散策



細川たかしの名曲で知られた「矢切の渡し」へ渡し舟を楽しみます。

寅さんで、おなじみの「柴又帝釈天」へ帰路へ
寺到着予定、夕方6時頃。
帰りは本厚木駅に寄ります。



定員52名です。定員になり次第、締め切ります。

申し込みは、お電話でどうぞ。

法徳寺 046-228-3962

住職 富士山へ

先日、初めて、富士山の頂上まで登ってきました。私にとって、かなり、厳しいものでしたが、何とか、頂上に登ることが出来ました。それというのも、何度も登っている弟のお陰です。弟は、私と登る三日前にも小学5年生の長男と登ってきたばかりでした。服装から登るルート、何から何まで、弟のアドバイスは、大変、役立ちました。登っていて、ふと、そういえば、仏教を山登りに例えられるな~と思いました。宗派は沢山あるが、目指す頂上は同じです。それでも、選ぶ登山ルートは一つです。私は、親鸞聖人に教えて頂いた阿弥陀如来の救いの道を選びました。この道は、どのような者でも、頂上にたどり着けるように選ばれた大変有難い道です。たとえ、歩けない方でも、阿弥陀如来様がヘリコプターを用意してくれていますよ(笑)。しかも阿弥陀如来様が操縦してくれます。山から下りてきて、車にたどり着いた私は、そのまま靴を脱ぐ元気もなくそのままシートに倒れこみました。弟は、平気な顔して帰りも車を運転してくれてました。そして、直ぐに電車で、千葉のお寺に帰って行きました。恐るべし体力!

ニコニコ法話会 時間 午後1時半~3時

10月 2日(火) 念仏奉仕・ニコニコ法話会
(毎年、報恩講準備の為、清掃奉仕をお願いしております。動きやすい格好で、ご参加下さい。)

11月 2日(金) ニコニコ法話会
12月 3日(月) ニコニコ法話会

皆様のご参加
お待ちしております!

報恩講号法話

昨年の今頃、京都の西本願寺の本堂で、ご門主様より辞令を頂き、正式に住職となり、早いもので一年が経ちました。最近になって、少し、住職の役職になれてきたように思いますが、昨年は、京都から戻り、すぐに報恩講で、住職継続法要をお勤めいたしました。あれから一年、今年もお彼岸が終わり、報恩講の季節がやってまいりました。

報恩講の意味

報恩講は、親鸞聖人のご苦勞を偲び、感謝する法要です。全国の浄土真宗の寺院で、聖人の命日の前後に、行われている浄土真宗で一番大切な行事です。親鸞聖人は、承安三年(1173)に、この日本にご誕生されました。聖人により、南無阿彌陀仏の浄土の教えは、その当時の僧俗共に、多大な影響を与えました。親鸞聖人は、九十年間のご生涯、ただ、ひたすら自らが救われた南無阿彌陀仏のみ教えを喜び、その教えを人々に伝えることに、全精力をついやされました。



↑ 法徳寺の親鸞聖人像

その間、大変なご苦勞、悲しい出来事も数多くございましたが、それを乗り越えられ、八十歳を過ぎて、尚、布教に衰えはありませんでした。しかし、ついに弘長二年(1262)十一月二十八日(太陽暦では、翌年一月十六日)九十歳のご生涯を静かに閉じられ、浄土へ往生されました。その時の様子を「親鸞伝絵」は、「世間の事については、全く口にされず、ただ阿彌陀如来のご恩の深いことばかりを申されておりました。声はといえば、お称名(南無阿彌陀仏)ばかりで、そのほかのことは、全くございませんでした」と伝えて

います。親鸞聖人の生き様は、とても身が引き締まる思いがします。聖人は、阿彌陀如来の救いを受け、人に伝え、人を幸せにすることが、ご自分の幸せに感じておられたのだと思います。

法事はなぜするのか？



報恩講は、七五〇年の間、続けられてきた、伝統ある行事です。分かりやすく言えば、毎年、親鸞聖人のご法事をお勤めしているのです。しかし、聖人を成仏させる為に、法事をしていいるのではありません。浄土真宗の法事は、「感謝」という気持ちの根底にあります。「感謝」とは、幸せを感じたときにするものです。亡き方は、阿彌陀如来の救いにより必ず仏様と成られています。迷い苦しんでいるのは、残された私たちの方ではないでしょうか。その私たちを、仏様は、いつも、護って下さっているのです。そして、私たちも、いつか、この世の役目が終わった後、必ず、浄土へ生まれ仏様と成らせていただきます。そんな幸せを感じながら、ご法事を勤めてほしいと思います。

報恩講は、七五〇年の間、続けられてきた、伝統ある行事です。分かりやすく言えば、毎年、親鸞聖人のご法事をお勤めしているのです。しかし、聖人を成仏させる為に、法事をしていいるのではありません。浄土真宗の法事は、「感謝」という気持ちの根底にあります。「感謝」とは、幸せを感じたときにするものです。亡き方は、阿彌陀如来の救いにより必ず仏様と成られています。迷い苦しんでいるのは、残された私たちの方ではないでしょうか。その私たちを、仏様は、いつも、護って下さっているのです。そして、私たちも、いつか、この世の役目が終わった後、必ず、浄土へ生まれ仏様と成らせていただきます。そんな幸せを感じながら、ご法事を勤めてほしいと思います。

報恩講は、七五〇年の間、続けられてきた、伝統ある行事です。分かりやすく言えば、毎年、親鸞聖人のご法事をお勤めしているのです。しかし、聖人を成仏させる為に、法事をしていいるのではありません。浄土真宗の法事は、「感謝」という気持ちの根底にあります。「感謝」とは、幸せを感じたときにするものです。亡き方は、阿彌陀如来の救いにより必ず仏様と成られています。迷い苦しんでいるのは、残された私たちの方ではないでしょうか。その私たちを、仏様は、いつも、護って下さっているのです。そして、私たちも、いつか、この世の役目が終わった後、必ず、浄土へ生まれ仏様と成らせていただきます。そんな幸せを感じながら、ご法事を勤めてほしいと思います。

報恩とは？

先ほど、報恩講は、親鸞聖人のご苦勞を偲び、感謝する法要だと申し上げましたが、「報恩」というのは、「恩に報いる、行動する」ということでもあります。それが、お念仏を称えることであり、仏様の前に座らせて頂いて、仏様の教えを聞くということでもあります。それが、仏様が喜んで下さることであり、安心して下さることであり、本当の供養なのです。親鸞聖人の願いも、亡き方の願いも、皆さんが、お念仏を称え、仏様の教えに出会い、安心した生き方をしてほしいということです。

念仏で

愛する方を失った後の心の空しさ、深い悲しみは、簡単に埋まるものではありません。しかし、仏様の前に座らせて頂く時だけは、少し元気になる、気持ちが落ち着くということがあると思います。

『俱会一処』(くえいつしよ)という阿彌陀経のお言葉は、亡き方とお浄土で、共にまた出会うことが出来るという意味です。私は、この言葉を、今既に、亡き方と今ここで出会っている、思いを共有出来るという意味であると頂いています。

私は、以前ある本で読んだのですが、自分のお子さんがご病気になる、医者からも、もう手の施しようがないと宣告された時に、大丈夫とか、絶対治るとい言葉よりも、手を握って、お母さんは、ずっとここにいますよ、離れることはないよという言葉に、子供は、一番安心したということを読んだことがあります。

阿彌陀如来は、現実の私を支えてくださる働きなのです。寂しい、不安なあなたのそば

を、仏様は常に離れず、護って頂いているのです。親鸞聖人は、阿彌陀如来様は、死んでからの救いではないということをお知らせしたのです。

普通のお寺

最近、手にした法教書に「普通のお寺」という言葉がありました。私も法徳寺を普通のお寺にしたいと長年勤めてまいりました。普通のお寺とは、生きている者が集い仏様のみ教えにより救われる場であり、いわば、生きたお寺です。お寺にお参り出来なくても、法徳寺だよりやホームページ、書店に並んでいる法教書などを読んでみて戴きたいと思えます。法事も葬儀も、亡き方を通じて生きている者が、仏教の教えに出会う場でもあります。

お浄土は帰る場所

お浄土は、いつでも帰れる場所です。私は、昔、京都で勉強している時、一緒になられた方が話してくれたのですが、その方は、お寺の次男に生まれ、長男の方がお寺を継ぎ、自分は、大学を卒業した後、東京でサラリーマンをやるといことになったそうです。家を出る時に、お兄さんが、「辛かったら、いつでも、帰ってこいよ」と言ってくれた。その言葉が凄く自分を支えてくれた、いつでも、帰れる場所、安心出来る場所があるからこそ、簡単に帰ってはいけなく、と東京で頑張ることが出来たそうです。それから、縁があつて、親戚のお寺の住職になることになり、一から勉強するために京都に来たということでした。お浄土は、私たちがいつでも迎えてくださる場所です。しかし、だからこそ、この娑婆世界で精一杯生きることが大切だと、教えられたことでした。

法話 法徳寺住職 伊東英幸